

特集>>> 800号記念

800号発刊に寄せて

一般社団法人 全国圧入協会 会長 中岡 智信



「建設機械施工」の創刊800号到達、まことにめでとうございます。月刊誌ですから途切れずに刊行が続いていれば創刊以来66年以上の歴史を刻んできたことになります。今年で終戦から71年になりますから、戦後まもなくスタートし、以来、社会や産業構造の変化を乗り越えて綿々と繋いで来たことになります。これは偏に建設機械施工協会と編集にかかわった多くの方々の尽力によるものと心から敬意を表するものであります。

我が国の近代的土木事業は明治維新以降にようやく産声をあげました。お雇い外国人の指導の下、内務省の直営で輸入資機材に頼りながら鉄道、治水、橋梁などの社会資本を整備してまいりました。その後、第二次世界大戦は敗戦に終わり、我が国の社会資本は完全に廃墟と化してしまいました。そのため、戦後の復興にとってインフラの確保が大きな課題になりました。幸い、米軍の残した建設機械を当時の建設省が受け継ぎ緊急の社会資本整備を進めました。これが、我が国における建設の機械化のスタートであったといえるでしょう。

やがて、復興期から経済発展期に移っていくにつれ建設機械の国産化も進み、大規模土木事業が次々と展開されていきました。この間、総合建設業、建設機械メーカー、学界、官界など広範な勢力を結集して建設の機械化を総合的に推進する母体となったのが、当時の日本建設機械化協会でありました。その後も時代の要請を受けて誕生した新しい業種をメンバーに加えつつ、時代の変化に対応して社会の要請に応えてきたといえましょう。その機関誌が「建設の機械化」であります。これまでの800号の一つひとつがその時の時代背景や技術を記録し、その先の展望や提案を書き留めています。それゆえバックナンバーは戦後の歴史文書

そのものといえましょう。

私と「建設の機械化」誌とのかかわりは、私が当時の建設経済局建設機械課長に在職していた平成4年から5年にかけての期間でした。当時は、建設機械課長はあて職で自動的に編集委員長を務めることになっていて毎月の編集会議に期待と不安を抱きながら臨んだものです。

記事の内容は非常に幅広く、かつ学術的にも高度で専門的な論文ばかりでした。編集委員には多様な分野の先端実務者や学識豊かな長老がずらりと居並んでおられて、シロウトとっていいような編集長としては戦々恐々として会議に臨んでいたものでした。

編集委員会では次号の内容の査読のほか、次々号以降の企画、執筆者の特定、特集の提案など盛りだくさんの議題ごとに編集幹事の説明をもとに意見交換がなされていきます。最後の査読では、内容のオリジナリティ、視点、構成からタイトル、用語はては「てにをは」に至るまで活発な査読意見が展開されます。私としては、中味もさることながら時間内に何とか結論が出るようにと祈りながら司会を務めたものでした。さらに、司会をしながら執筆者でなくて幸運だとつくづく思っていました。それが、何の因果か四半世紀を経て書くほうに回った不運を嘆いているところです。

世の中は目まぐるしく変化しています。建設省は国土交通省となり、建設機械課は建設施工企画課を経て総合政策局公共事業企画調整課となりました。日本建設機械化協会は（一般社団法人）日本建設機械施工協会となりました。「建設の機械化」誌は「建設機械施工」誌となって現在に至っています。

建設機械は輸入に頼っていた時代から国産を成し遂

げ、今や、世界中で活躍する主力の輸出産業になってきました。ほとんどの建設工事では工種、工法ごとに専用の機械があり、必要に応じて新しい工法と機械が続々と生まれています。人力の時代を克服するために機械化を目指したのは今は昔のことになりました。超大型からミクロの世界、大深度地下、海中、深海、宇宙での工事などと機械施工の舞台が広がれば人類の活動領域も広がり、社会の要請に応じて機械施工は変化発展をしていきます。その旗振り役となるのが「日本建設機械施工協会」であり、その機関誌が「建設機械

施工」であります。

建設省在職中にはなんだかんだと建設の機械化に係る機会が続いていましたが、退職と同時にしばらく遠ざかっていました。約20年のご無沙汰を経て、このたび「圧入工法」を通じて日本建設機械施工協会のお世話になることになりました。不思議なご縁と思い感謝しています。

今回のことで執筆はこりごりしましたが、また1000号の時にも書かせていただくことを楽しみにいたします。

